

報 告

臨床実習における理学療法学生の自己評価としての
成果に関する意識調査甲 田 宗 嗣¹ 上 川 紀 道¹ 伊 藤 祥 史¹ 平 岩 和 美¹
馬 屋 原 康 高¹ 大 塚 彰¹ 富 樫 誠 二¹

抄 録

本研究の目的は、臨床実習における学生の自己評価としての成果の意識調査を行うことで、学生の特徴に合わせた個別教育のための示唆を得ることとした。

対象は、全ての臨床実習を終了した4年制理学療法士（PT）養成専門学校最終学年の学生34名であった。

臨床実習全体の成果より、対象者を成果大群と成果中群に分類できた。リッカート尺度による具体的成果の比較では、介入知識、介入技術、評価知識、評価技術、PT志向、職場就職志向の6項目で有意差が認められた。自由記述では、成果大群では、理学療法の思考過程を理解できたことに成果を感じていた。一方、成果中群でこれらの内容を記述した者はおらず、コミュニケーションを含めた患者との接し方に成果を感じた者が多かった。

成果中群では理学療法の知識や技術の習得が不十分であり、理学療法プロセスの理解が深まらず、臨床実習の成果が一般的な対人関係の構築にとどまっていたことが示唆された。

Key words: 理学療法士養成校、臨床実習、自己評価、意識調査、リッカート尺度

1. はじめに

臨床実習の教育目標について、平成27年3月31日に厚生労働省から各都道府県知事宛に出された通達「理学療法士作業療法士養成施設指導ガイドラインについて」（医政発0331第28号）の中で、「社会的ニーズの多様化に対応した臨床的観察力・分析力を養うとともに、治療計画立案能力・実践能力を身につける。学内における臨床演習を行った後に、各障害、各病期、各年齢層を偏りなく行う」と記載さ

れている。このガイドラインで記載されている教育目標は教育の方向性を示した目標であり、臨床実習の到達目標は明示されていない。一方で、理学療法教育ガイドライン（第1版）では到達目標が明示されており、到達目標のミニマムを「ある程度の助言・指導のもとに、基本的理学療法を遂行できる」と定義されている¹⁾。

これらの教育目標や到達目標は臨床実習指導者が定められた評価表を用いて達成度や到達度を評価しているが、臨床実習でどのような成果を上げ、何が課題であると感じたかなど、学生自身の自己評価としての成果も重要と思われる。しかし、臨床実習における学生に対する意識調査は、臨床実習中のスト

受稿：2016年10月18日 受理：2017年4月10日

¹ 広島都市学園大学健康科学部リハビリテーション学科
〒731-3166 広島県広島市安佐南区大塚東3丁目2-1

レスやその要因に関する報告が多く²⁾⁻⁵⁾、自己評価としての成果に関する研究はほとんど見当たらない。学生の自己評価としての成果を調査することにより、臨床実習における学生の習熟過程を理解でき、学生教育や臨床実習指導者との情報共有を円滑に行う一助になるものと考えた。

2. 目 的

本研究の目的は、臨床実習における学生による自己評価としての成果を調査することで、学生がどのようなことに対し、どの程度成果を感じているのかを明らかにすることを目的とした。

3. 方 法

3.1 対象

対象は、全ての臨床実習を終了した4年制理学療法士養成専門学校最終学年の学生39名にアンケートを配布し、34名（男性20名、女性14名）から回答を得た（回収率87%）。アンケートは、全ての臨床実習が終了した時点で実施した。臨床実習の期間は合計20週間で、期間の2/3以上を病院、有床診療所、無床診療所などの医療機関で実習し、その他、介護老人保健施設などの医療機関以外の施設で実習した。概ね1施設に対し1名の学生が配置され、臨床実習指導は3年以上実務経験がある理学療法士が行なった。

対象には研究の目的、個人が特定されることのない無記名式アンケートであること、回答用紙の提出をもって同意とみなす旨を書面と口頭にて説明し、回答を得た。

3.2 アンケート内容

臨床実習の成果に関する自己認識を調査するため、臨床実習全体の成果と具体的な成果について5段階リッカート尺度にて質問項目を自作し、調査した。リッカート尺度の選択肢は「とても思う」、「どちらかといえば思う」、「どちらでもない」、「あまり思わない」、「ほとんど思わない」の5段階とした。臨床実習全体の成果の質問は、臨床実習すべての期間を振り返り、成果があったかどうかであり、臨床実習の具体的な成果の質問は、理学療法治療・介入

の知識が身に付いた（以下、介入知識）、理学療法治療・介入の技術が身に付いた（以下、介入技術）、理学療法評価の知識が身に付いた（以下、評価知識）、理学療法評価の技術が身に付いた（以下、評価技術）、基礎医学や一般臨床医学の知識が身に付いた（以下、医学的知識）、レポートや書類の作成スキルが身に付いた（以下、レポート作成）、社会人としてのマナーが身に付いた（以下、社会人マナー）、患者との人間関係構築が身に付いた（以下、患者人間関係）、臨床実習指導者や職員との人間関係構築が身に付いた（以下、職員人間関係）、理学療法士になりたい気持ちが強まった（以下、PT志向）、臨床実習施設に就職したい気持ちが強まった（以下、職場就職志向）であった。質問項目と略語をTable 1に示す。

また、成果に関する自由記述式アンケートとして、「臨床実習すべての期間を振り返り、もっとも成果があったと思うことを1つ挙げ、できるだけ具体的にその内容を記載してください」、「臨床実習すべての期間を振り返り、成果を上げることができず、もっとも悔やまれることを1つ挙げ、できるだけ具体的にその内容を記載してください」という質問を設けた。

3.3 分析方法

臨床実習全体の成果に対する回答から、とても成果があったと認識していた群（以下、成果大群）、どちらかといえば成果があったと認識していた群（以下、成果中群）の2群に対象を分類し、2群間を比較した。

2群間での具体的な成果の比較をウィルコクソンの順位和検定にて行った。統計解析にはR for mac (ver.3.2.3)を用い、統計学的有意水準を1%に設定した。

成果に関する自由記述は記載内容をカテゴリー化し、2群それぞれにおける各カテゴリーに占める割合を算出した。

4. 結 果

4.1 全体成果

臨床実習全体の成果について、成果があったかとの問いに対し、とても思うと回答した成果大群が

Table 1 リッカート尺度による質問項目と略語

臨床実習全体の成果
臨床実習すべての期間を振り返り、成果があった
具体的な成果
理学療法治療・介入の知識が身に付いた（介入知識）
理学療法治療・介入の技術が身に付いた（介入技術）
理学療法評価の知識が身に付いた（評価知識）
理学療法評価の技術が身に付いた（評価技術）
基礎医学や一般臨床医学の知識が身に付いた（医学的知識）
レポートや書類の作成スキルが身に付いた（レポート作成）
社会人としてのマナーが身に付いた（社会人マナー）
患者との人間関係構築が身に付いた（患者人間関係）
臨床実習指導者や職員との人間関係構築が身に付いた（職員人間関係）
理学療法士になりたい気持ちが強まった（PT 志向）
臨床実習施設に就職したい気持ちが強まった（職場就職志向）

24 名（71%）、どちらかといえば思うと回答した成果中群が 10 名（29%）であり、どちらでもない、あまり思わない、ほとんど思わないと回答した者はいなかった（Fig. 1）。

4.2 群間での具体的成果の比較

臨床実習における具体的成果について成果大群と成果中群との比較では、介入知識、介入技術、評価知識、評価技術、PT 志向、職場就職志向の 6 項目で有意差が認められた。効果量より、評価知識の項目において両群間の差が最大となった（ $r=0.606$ ）（Table 2）。

4.3 最も成果があったと思う事項

臨床実習で最も成果があったと思う事項に関する自由記述では、成果大群はトップダウン式の評価、統合と解釈などの思考過程が身に付いたことを挙げた者が最も多かった（7 名、29.2%）のに対し、成果中群はこのカテゴリーに関する記載はなかった。一方で、成果中群はコミュニケーションを含めた患者との接し方が身に付いたことを挙げた者が最も多かった（6 名、60%）のに対し、成果大群はこのカテゴリーを挙げた者は少数であった（3 名、12.5%）（Table 3）

4.4 成果を上げることができず最も悔やまれる事項

成果を上げることができず最も悔やまれる事項に

関する自由記述では、患者や指導者に対する消極的態度、漠然とした知識不足、統合と解釈の未熟さ、介入・評価技術の未熟さを挙げる者が多かったが、2 群間の特徴は認められなかった（Table 4）。

5. 考 察

5.1 具体的成果の群間比較

「臨床実習すべての期間を振り返り、成果があった」という問いに対し、すべての対象が「とても思う」もしくは「どちらかといえば思う」と回答した。臨床実習の期間は合計 20 週間と長期間であるため、何らかの成果を感じることは当然であり、成果を感

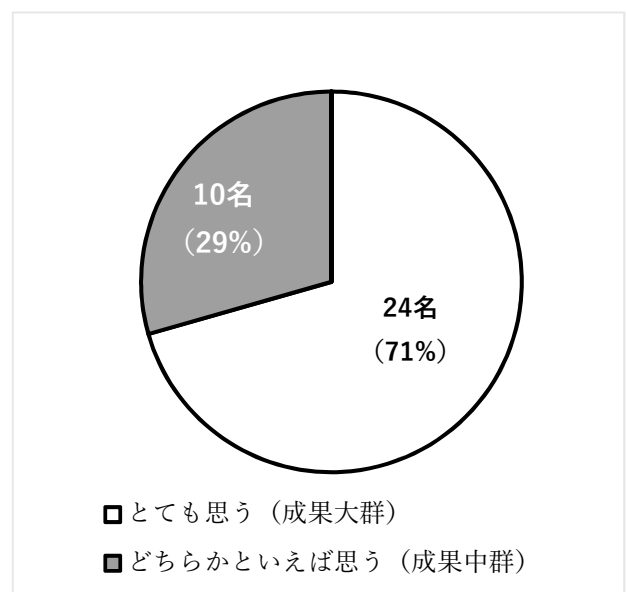


Fig. 1 臨床実習全体の成果

Table 2 臨床実習における具体的成果の比較

成果項目	成果大群 (n=24)	成果中群 (n=10)	p 値	r
	median (1st QR, 3rd QR)	median (1st QR, 3rd QR)		
介入知識	5 (4, 5)	4 (3.25, 4)	*	0.517
介入技術	4 (4, 5)	4 (3, 4)	*	0.481
評価知識	4 (4, 5)	3.5 (3, 4)	*	0.606
評価技術	4 (4, 5)	4 (2.25, 4)	*	0.452
医学的知識	4 (4, 5)	4 (4, 4)	NS	0.263
レポート作成	4 (4, 5)	4 (4, 4)	NS	0.137
社会人マナー	5 (4, 5)	4.5 (4, 5)	NS	0.231
患者人間関係	5 (5, 5)	4.5 (4, 5)	NS	0.325
職員人間関係	5 (4, 5)	4 (4, 4)	NS	0.349
PT 志向	5 (4, 5)	4 (3, 4)	*	0.518
職場就職志向	5 (4, 5)	3 (3, 4)	*	0.546

ウィルコクソンの順位和検定, * : $p < 0.01$

NS: not significant, r : 効果量

Table 3 臨床実習で最も成果があった事項

事項内容	成果大群 n (%)	成果中群 n (%)
トップダウン式の評価, 統合と解釈などの思考過程	7 (29.2)	0 (0)
学校での勉強との関連	4 (16.7)	0 (0)
患者の個別性の理解	3 (12.5)	0 (0)
理学療法の全体的イメージ	4 (16.7)	1 (10)
評価や治療の経験	3 (12.5)	3 (30)
コミュニケーションを含めた患者との接し方	3 (12.5)	6 (60)
計	24 (100)	10 (100)

Table 4 臨床実習で成果を上げられず最も悔やまれる事項

事項内容	成果大群 n (%)	成果中群 n (%)
患者や指導者に対する消極的態度	6 (25)	1 (10)
漠然とした知識不足	6 (25)	2 (20)
統合と解釈の未熟さ	5 (20.8)	2 (20)
介入・評価技術の未熟さ	4 (16.7)	3 (30)
主体的学習の不足	1 (4.2)	1 (10)
文章表現の未熟さ	1 (4.2)	0 (0)
リスク管理が不十分	1 (4.2)	0 (0)
体調不良	0 (0)	1 (10)
計	24 (100)	10 (100)

じる程度の差（とても思う：成果大群，どちらかといえば思う：成果中群）が臨床実習の習熟過程を分析する上で重要と考えた。

臨床実習の具体的成果について，成果大群は成果中群と比較して，介入知識，介入技術，評価知識，評価技術で大きな成果を感じていた。岩崎⁶⁾らは，理学療法養成課程における臨床実習前後での学生の行動を調査したところ，実習後では具体的な行動目標を立てることができるようになったと報告している。本研究結果からも，理学療法の根幹をなす具体的な知識や技術で成果を感じた者は，臨床実習全体としての成果を感じる事が明らかとなった。また，成果大群ではPT志向，職場就職志向が強いことが明らかとなり，効果量から判断すると知識や技術と同程度の差が認められた。PT志向や職場就職志向は臨床実習前の学内教育の影響や臨床実習指導者，臨床実習施設の影響を強く受けているものと思われる。従って，学内教育では理学療法士としてのプロフェッショナルリズム教育を行うことが重要であり，臨床実習指導者や施設については臨床実習施設に学生を配置する前にチューターが面談を行い，マッチングの精度を高めるなどが重要であるものと考えられた。

5.2 最も成果があったと思う事項の群間比較

成果大群では，トップダウン式の評価，統合と解釈などの思考過程，患者の個性の理解，学校での勉強との関連などに成果を感じており，理学療法プロセスの理解が深まり，症例の障害特性や来歴に応じた対応の必要性を感じていた。一方，成果中群でこれらの内容を記述した者はおらず，コミュニケーションを含めた患者との接し方に成果を感じた者が多かった。これらのことから，成果中群では理学療法の知識や技術の習得が不十分であり，理学療法プロセスの理解が深まらず，臨床実習の成果が一般的な対人関係の構築にとどまっていたことが示唆された。

5.3 成果を上げることができず悔やまれる事項の群間比較

臨床実習で成果を上げることができず最も悔やま

れる事項の群間比較では，両群間に特徴的な差は認められず，両群とも患者や指導者に対する消極的態度，漠然とした知識不足，介入・評価技術の未熟さ，統合と解釈の未熟さに対して後悔していた。最も成果があったと思う事項では群間差が認められたことと合わせて考察すると，臨床実習に対する学習の方向性は両群で類似していたものの，臨床実習前の知識や技術の習得状況，理学療法士に対する志向性や臨床実習施設との親和性に違いがあったことなどから，成果としては両群間で差が認められたものと考えられた。

5.4 本研究の限界と今後の課題

本研究では，全体的成果に影響をおよぼすと考えられる具体的成果を11項目あげたが，これらの具体的成果は全て学生が自己評価できる内容であり，全体的成果に影響を与える可能性のある臨床実習施設の特徴，臨床実習指導に従事した理学療法士数や理学療法士としての経験年数などは考慮されていない。従って，本研究結果の解釈は学生の自己評価の範疇にとどまることが研究の限界としてあげられる。さらに，自己評価の内容が具体的な行動記録に基づくものではないことも限界としてあげられる。また，5段階リッカート尺度により成果大群と成果中群の2群に分類して群間差を分析したが，成果を主観的に感じる程度の差は個人の性質に依存する可能性があることについても本研究の限界である。

これらの研究の限界に対し，臨床実習中の行動記録と主観的評価を併用するなど工夫して，引き続き研究を進める必要があるものと思われる。

6. 結 論

- 1) 理学療法士養成校において，臨床実習を終了した最終学年の4年生に臨床実習における自己評価の成果としての意識調査を行った。
- 2) 臨床実習全体の成果より，対象者を成果大群と成果中群に分類できた。
- 3) 具体的成果について成果大群と成果中群との比較では，介入知識，介入技術，評価知識，評価技術，PT志向，職場就職志向の6項目で有意差が認められた。

- 4) 成果大群では、トップダウン式の評価、統合と解釈などの思考過程、患者の個別性の理解、学校での勉強との関連などに成果を感じていた。一方、成果中群でこれらの内容を記述した者はおらず、コミュニケーションを含めた患者との接し方に成果を感じた者が多かった。
- 5) 成果を上げることができず悔やまれる事項における両群間の違いは認められなかった。

謝 辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に感謝いたします。

なお、利益相反に相当する事項はありません。

引用文献

- 1) 大橋ゆかり. 専門教育におけるモデル・コア・カリキュラムを考える. 理学療法学 2010; 37 (8): 622-624.
- 2) 大城昌平, 水池千尋, 重森健太, 根地嶋誠, 西田裕介, 大町かおり, 他. 理学療法専攻学生の臨床実習とストレス. 聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部紀要 2007; 3: 1-7.
- 3) 中野良哉, 野々篤志, 塩見将志. 臨床実習における心理的ストレス反応とレジリエンスとの関連. 高知リハビリテーション学院紀要 2008; 10: 1-7.
- 4) 中野良哉, 山崎裕司, 酒井寿美, 平賀康嗣, 栗山裕司, 重島晃史. 理学療法学生の実習終了後のストレス反応 - 実習における対人ストレスイベントとレジリエンスに注目して -. 理学療法科学 2011; 26 (3): 429-433.
- 5) 松崎秀隆, 原口健三, 吉村美香, 森田正治, 満留昭久. 臨床・臨地実習で医療系学生が感じる不当待遇. 理学療法科学 2015; 30 (1): 57-61.
- 6) 岩崎裕子, 酒井桂太, 大床桂介, 中原照男, 浜田慶子, 御厨征一郎. 臨床実習の行動に対する学生の意識について. 理学療法学 2003; 30 (Suppl 2): 271.

Physical therapy students' perception of the outcome of clinical clerkship

Munetsugu KOTA¹ Norimichi KAMIKAWA¹ Shoji ITO¹
Kazumi HIRAIWA¹ Yasutaka Umayahara¹
Akira OTSUKA¹ Seiji TOGASHI¹

Abstract

This study aimed to investigate physical therapy students' perception of the outcome of clinical clerkship. The subjects were 34 physical therapy students who had completed their vocational college's clinical clerkship program. They were divided into two groups according to the overall outcome of their clinical clerkship: big-outcome group (BOG) and medium-outcome group (MOG). By comparing the specific outcomes of the two groups based on a Likert-scale questionnaire, it was found that the BOG experienced bigger outcomes than the MOG with regard to intervention skills, intervention knowledge, evaluation skills, evaluation knowledge, and motivation to become a physical therapist. According to the semi-structured questionnaire, many students in the BOG experienced the outcome of understanding a physical therapist's thought process. On the other hand, in the MOG, no student experienced this outcome, although many students experienced it while attending to patients. In the MOG, students did not adequately acquire the knowledge and skills of physical therapy, so they did not experience the outcome of understanding a physical therapist's thought process.

Key words: vocational college of physical therapist, clinical clerkship, self-evaluation, attitude survey, Likert-scale questionnaire

¹ Department of Rehabilitation, Faculty of Health Sciences, Hiroshima Cosmopolitan University
3-2-1 Otsukahigashi, Asaminami-Ku, Hiroshima 731-3166, JAPAN